

東北北部の縄文式に後続する土器

村 越 潔

1.

東北地方の縄文式最末期の土器は大洞A'式といわれ、この型式は岩手県大船渡市赤崎町所在の大洞貝塚を、大正14(1925年)長谷部言人・山内清男氏が発掘し、とくに山内氏がA'地点で採集された土器を、他地点(B・C・A地点)との比較において、器形・文様などに相違のある事実から整理され、型式名をA'式と命名して以後一般に呼称されていた¹⁾。そしてこの型式の土器が、関東地方北部の女方遺跡などでは、同地方の弥生式初期の土器とともに発見され²⁾、したがって縄文式最末期の土器は、弥生式土器が伝播したその当初と時代的に並行する、つまり縄文式晩期の大洞A'式土器の時代は、弥生式の女方式土器と同時代であるという関係が把握されて、縄文式から弥生式に移行する両文化の繋がりが認められたのである。このように大洞A'式土器の設定は、わが国の古代文化を物語る上で重要な発見であり、その設定を行なった山内氏の功績は高く評価されよう。

東北北部の縄文式最末期の土器も前述の大洞A'式土器であるが、近年芹沢長介氏によって、弘前市大字三和(旧青森県中津軽郡新和村大字三和)に所在する灌漑用の、砂沢溜池南岸から多量に出土する同型式の土器を、標準型式として命名された砂沢式がある³⁾。この土器は浅鉢がもっとも多く、ほかに台付・壺・甕形などがあり、いずれも器面に2個ないし4個の粘土粒を中心とする工字文が施されている。しかし一口に工字文といっても、普通に称される大洞A'式の工字文と若干の異なりを見せ、東北南部や太平洋側の 大洞A'式が平行線的な工字文(以下平行工字文と称す)であるのに対し、砂沢式の場合は極言すると、2つの三角形の頂点を合わせたような工字文(以下三角工字文と称す)である。砂沢式にはこのような精製土器のほか、粗製の甕・深鉢・壺などがあり、出土する土器の90%以上はこの種の土器で占められている。岩木山麓の開拓ともなう緊急調査で発掘された、この型式の土器を出土する湯ノ沢遺跡からは、注口の破片も1例だが出土している。したがって数はすくないが注口土器も製作されたい。なお砂沢式に関しては、芹沢氏の著書⁴⁾に詳しく述べられているので省略する。

註 1) 山内清男, 所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末 考古学 1 の 3。

註 2) 田中国男, 縄文式弥生式接触文化の研究 (単行本)。

註 3) 芹沢長介, 石器時代の日本 (単行本)。

註 4) 註 3 に前掲。

ところで従来は以上述べた砂沢式が、縄文式終末の土器として認定され、津軽地方の土器編年ではその後に弥生式の田舎館式土器が登場し、縄文式と弥生式の移り変わりは、一応完成したかに思われる。しかし砂沢式土器と田舎館式土器を比較すれば、両者が直接結び付いて、砂沢式から田舎館式に移行するとは考えられないし、東北大学の伊東信雄氏がいわれる如く、“大洞A'式から田舎館式が生れて来るためには大洞A'式にプラスアルファがなければならぬ”⁵⁾のであって、そのプラスアルファこそ両者を繋ぐ掛け橋として、編年上重要な位置を占めるのである。

1961年6月に、この砂沢式と田舎館式のあいだを埋めるようなタイプの土器を発見した。これを仮に五所式と称し、以下詳細を報告する。

2.

五所式土器の出土地は、青森県中津軽郡相馬村大字水木在家字桜井にあり、昨年(1964年)10月の再調査では、遺跡の現状が蔬菜畑とリンゴ畑に化していた。この一帯はかつて五所の山といわれ、採草地として利用する以外は放置されて来たが、1932年に開墾地として分割し、以後は緩慢ながら開拓も進んで、最近では標高 274m を有する大森山の麓に達している。この開墾地の作付けはリンゴが大半を占め、他は菜種と蔬菜である。

われわれは当初、字名を型式の名称にと考えたが、東北南部に同名があるため、土地の人々が称し、もっとも知られている五所の山から型式名と遺跡名を頂戴した。

遺跡は、大森山の北へ延びるゆるやかなスロープが尽きるところにあり、大森山の山頂から北北西 約800m に位置する。この開墾地一帯は遺跡が多く、中期ならびに晩期の土器が見られ、ここに報告する遺跡は第6番目の発見で、従来五所第6号遺跡と称して来ていた。

われわれが知人の知らせを受けて現地へ達した時は、ハンドトラクターによる開拓の真っ最中であった。しかし幸いにして遺物の包含状態を知ることが出来、表面に露出された全遺物の採集が可能となって、残念ではあったが別な意味では好都合でもあった。だがこの土器の伴う遺構は何んら痕跡をとどめぬほどに破壊され、わずかに焼土の存在を確認したに過ぎない。

所見によると遺跡の層序は次のようであった。上部から、第1層が約15cmの黒褐色を呈する腐植土層で、遺物はすべてこの層に包含されている。次の第2層は、厚さをところによって異にするが、約20cmの黄褐色粘土質土層となり、遺物は包含していない。しかし他の五所第2号ならびに第3号遺跡では、これと同じ層から縄文式中期の円筒土器上層B式

註 5) 伊東信雄, 東北北部の弥生式土器 文化 24の1 p.34.

土器が発見されている。したがって遺跡を異にすれば、まったくの無遺物層ではない。つづく第3層は赤色の混じった淡黄色砂質土層となるが、この層の上部で掘下げを打切ったため、厚さは一切不明である。しかし上部の層との関係や、切崩した道路脇の地層状態から、遺物の包含は考えられず、おそらく洪積層と思われるが、詳細は地質学者の認定を待つこととする。

3.

採集された遺物は第1・第2次の調査を含めて、リング箱に換算すれば2箱に相当する。土器はすべて破片であり、復原されて全形を知り得るものはない。石器は剝片の両側に刃の付された、いわゆるナイフ的な機能を果すもののみである。

A. 土器（第2図・図版参照）

精製・粗製と称されるものを含めて、完全に全体の器形を知り得るものはない。しかしそれぞれの土器破片が有するカーブから、ある程度までの器形は推定することが出来る。

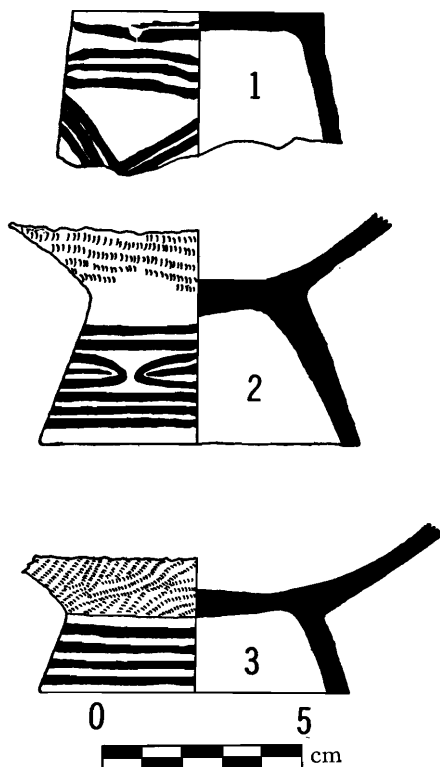
精製土器（第2図1～19）

器形は浅鉢形・台付浅鉢・壺形・甕形などがある。このなかで浅鉢形と思われる土器片は、数において半数近く認められる。しかし厳密には台付浅鉢の破片も、あるいは含まれているかも知れないから、実数は左程多くもなからう。

浅鉢形土器（1～10）。この形に含まれる土器の口縁は波状をなすのが圧倒的に多く、なかに1例平縁のものが見られた。波状口縁はその波が山形（三角状）を呈するものと、末端に装飾用の突起を有するもの(2)の2種類ある。器面の文様は沈線を主とした砂沢式に類似する工字文が施され、この文様が本型式の主文様となっている。しかし砂沢式と相違する点は、文様の中心部に粘土粒の存在がなく、また沈線の中がきわめて細いという2つの点を挙げることが出来る。口辺には2本の沈線を表裏に巡らすのを普通とするが、なかには(3・7)の如く、裏面に3本の沈線が施されたものもある。このような口辺とその下部を沈線で画した内部は、表裏とも三角状の滑沢面をなす。器壁の厚さは口辺部4～5mm、それ以下は4～6mmである。色は赤褐色・黒褐色・灰褐色を呈し、胎土には砂粒を含むが焼成は良好である。

台付浅鉢形土器（第1図1～3・第2図11・12）。この形の土器は台を数えると8個あり、いずれも上部が毀われ欠失している。したがって厳密にいうと、全体が如何なる器形を有していたかは明らかでない。しかし砂沢式との関連や、台そのものの角度と付随する破片から、浅鉢に台の付く形と思われる。この土器の確かに上部と考えられる破片は、1例存在するが、口辺・文様なども前述の浅鉢形と同様で特記するほどではない(4)。一方台そのものは(第1図)、いずれも高さに関係なく外へ幾分広がるもので、高さは低いもの1.7cm

第1図



第1図・五所式台付浅鉢形土器

無文のもの(16)などがある。(13)は胴部下半に炭化物が付着し、そのため色は上半の赤褐色に対して黒褐色を呈している。残る土器片は灰褐色ならびに暗褐色である。土器の裏面は壺形土器特有の整形の悪さが見られ、製作のむずかしさを物語っている。厚さは5~10mmあり、胎土・焼成とも前述の土器と同様である。

甕形土器(第2図14~19)。口縁はすべて波状をなし、それもゆるやかなものと、大きくカーブを描くものがある。前者の口縁は三角状をなすのみだが、後者は上端に手を加え2つの山を形成する。破片のため器形全体は不明であるが、しかし大部分は口辺の大きく外反する土器と思われる。すべて口辺部には縦へ走る縄文が見られ、また口縁にそって2本の沈線を巡らすもの(15・17)もある。これに類する沈線は内面にも施され、口縁にそって1ないし2本巡らす、数は2本が普通のようなものである。口辺部以下の文様は沈線による工字文のみを有する(14)と、沈線のあいだを1ないし2列の列点文で埋めた土器(15)がある。胴部下半は縦または斜行の縄文や、沈線の下を刺突で埋めたもの(19)も見られるが、破片がすくないため、どちらの数が多いか今のところわからない。底部は底が幾分外へ張り出しの形をなすものも存在するが、強調するほどではない。底は平底である。厚さは口辺部4~

高いもの4.3cmあるが、3.7cmのものが多い。文様は4本の平行沈線を巡らすもの(3)と、浅鉢形土器の口辺の如く、三角状無文部を有する(1)がある。台の内面には何ら文様は見られない。台と上部との文様の関係を述べれば、(1)が浅鉢形に一般的な沈線による工字文であり、沈線を主とした(3)と、工字文を有する(2)は斜行縄文が施文されている。砂沢式のこの種の土器に見られる内面の円形文は、五所式に存在しない。厚さ5~7mmあり、色調・胎土・焼成とも浅鉢形と同様である。

壺形土器(第2図13・16)。口辺ならびに口頸部が未発見のため、全体の器形および大きさは不明である。しかし破片より想像すれば、可成り大形のものも存在したようである。文様は胴部上半を沈線による工字文で、下半を斜行または縦位の縄文で埋めたもの(13)、口頸部付近に4本の平行沈線を巡らし、胴部が

6 mm, 胴部もほぼ同様だが, 底は若干厚く 7~8 mmある。器面は黒褐色・灰褐色を呈し, 口辺の一部には煤の如きものの付着もある。胎土・焼成とも良好である。

粗製土器 (第2 図20~29)

粗製土器は精製土器に比較して採集された量も多く, 約5倍ほどある。いずれも破片だが, 口辺部ならびに底部より推定すると, すべて甕形土器の如く思われる。器面に施された文様は縄文が多く, それも縦に走らしたものが圧倒的である。次に多いのは斜行縄文だが, 左右どちらが多いと断じ得ない。残る文様は縦位に施された櫛目状の沈線文である。口縁はすべて平縁をなし, 口辺が大きく外反するものと, 左程外反しないものの2種類ある。前者の土器は厚手で, 口辺部は無文帯をなし, 肩部にいたって細い竹のような道具を, 右から突き刺したいわゆる刺突文が, 2列にわたって施文され, それ以下は縦位の縄文ないしは1本の沈線下に, 右下りの斜行縄文をもって埋めている²⁰⁾。しかし底部付近は一種の無文帯をなして底に達する。底は平底である。器壁の厚さ口辺1.2cm, 胴部8 mm, 底1.6cmあった。一方後者の口辺部の反りがすくない土器は, 口辺6~7 mm, 胴部7~9 mm, 底0.8~1.3cmほどで, 前者に比較すれば薄手であり, 文様も口縁付近に沈線を走らせ, 以下縦位ないしは, 斜行縄文をもって器面が埋められている。それに対し口縁から縦位の縄文を有する土器²²⁾は, 頸部に2列の刺突文が入っている。色調は厚手の土器が赤褐色を呈し, 薄手は赤褐色・黒褐色・暗褐色・灰褐色を呈するが, なかでも赤褐色がとくに多い。土器の表面には黒く炭化物の付着が認められる。底は平底だが中央部は若干揚がり気味である。櫛目状沈線文を有する土器²⁶⁾は, 口辺部ならびに底部の破片が発見されず, 如何なる形をなすのか詳細はわからない。一般に胎土・焼成とも精製土器と比較すれば, 差のあるのは否定出来ないが, しかし厚手土器のように, 精製土器と比較して何ら劣らないものもあり, むしろ精製の浅鉢形土器のなかに, 質の悪いものも存在する。そのため土器の胎土・焼成から, 粗製と精製の2種類に分類しても, 両者を分け得る根拠はきわめて薄い。たとえば亀ヶ岡式と称される土器を, 精製と粗製に分け得るその根拠は, 煮沸用具として使用したか否かと, 胎土・焼成による相違であろう。五所式の場合は精製に加えられる土器も, 一部は明らかに煮沸用具として使用されたと思われ, 器面の内外に炭化した煤の如き付着が存在する。したがって精製・粗製の余韻は残るが, 砂沢式に認められるような明瞭差は, この時期に失われつつあったと考えられる。

B. 石 器

ナイフの如き機能を果たすと思われるが, 形は普通の石器のような体をなしていない。長さ9.8cm, 巾4.0cm, 厚さ1.8cmある。表面は中央を縦に1本の稜線が入り, 剝離面の残る裏は技法の失敗によってか2次的に加工をなして, 刃部を鋭くしている。そのため断面は



上部が菱形，下部は三角をなす。両側に *Trimming* が施され，裏も片側のみそれが顕著である。第1次調査で採集した。

4.

以上述べた五所式土器は，縄文式終末期の砂沢式にもっとも近似し，また秋田県男鹿半島出土の志藤沢式や，岩手県一関市西郊発見の谷起島式にも類似する。

砂沢式土器は，浅鉢形・台付浅鉢・壺形・甕形などの器形を有するが，とくに多く発見される例は浅鉢形土器である⁶⁾。これに対し粗製土器は甕形が圧倒的に多く，次いで台付甕形，壺形の順で，注口土器にいたってはきわめて稀の発見となる。一方五所式は，砂沢式に見られる甕形や注口土器はなく，粗製においても甕形のみで，砂沢式にくらべ器形の種類はすくない。文様は両式とも工字文を有する点で共通するが，砂沢式が2ないし4個の粘土粒を文様の中心に配し，比較的巾の広い沈線で描かれた工字文を，多く有するのに対し，五所式には粘土粒が見られず，沈線そのものも細く描かれ，厚さは概して薄手につくられている。また口辺部内面の沈線も多い。このように，精製土器ではいくつかの相違を見ることが出来るが，粗製土器でもまた2・3の異なりを挙げることが可能である。たとえば五所式の厚手土器に類するものは砂沢式に見られず，口縁は五所式が平縁のみに対し，砂沢では波状・平縁・山形など変化が多く，器形も同様バラエティに富むが，文様ではそれほど相違はない。この面における唯一の違いは，砂沢式に一般的な口辺部の沈線文が五所式に存在せず，逆に五所式の厚手土器頸部の刺突文は，砂沢式に見出されぬという，わずかの相違のみである。

斯くの如く両者を比較すれば，精粗両製の土器に目立つほど大きい異なりは見られず，器形のバラエティや，沈線の数，それに胎土・焼成の部分的な面における異なりのみである。

さきに砂沢式との相違を述べたが，範囲を広げて，東北北部で発見された類似土器との関係について記しておきたい。東北地方を縦断する奥羽山脈の東側には，前述の谷起島式土器があり，そのなかで鳥畑氏によって分類されたA・B両類のうち，B類にきわめて近い関係を有する。しかし具体的にはなお砂沢式に近い。たとえば谷起島式の器面に施された主文様は，沈線をもって変形工字文を描き，この工字を構成する沈線は，区画の下部に集中の傾向がある⁷⁾。これに対して五所式は，砂沢的な工字文構成が強く見られ，さきに述べたと同様，谷起島式より砂沢式に近い。このような両者の相違は，普通にいわれ

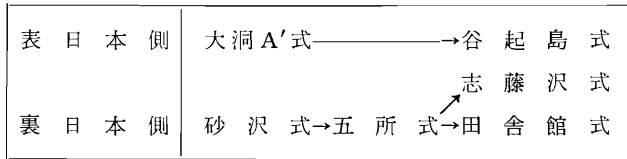
註 6) 註 3 に前掲。

1958年の岩木山麓湯ノ沢遺跡の発掘によって確認した。

註 7) 鳥畑寿夫，岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について 上代文化 25輯。

る大洞A'式と砂沢式の如く、地域差によるものから出発して、同時期でありながら文様技法の面で、多少の相違を生じたのだとも考え得るが、しかし五所には谷起島の如く、変形山形文を有する土器が発見されていない点と、文様面で砂沢式に近似の面から、谷起島式の前にその編年的位置を定めたい。

一方、裏日本には秋田大学で発掘した志藤沢遺跡がある。この遺跡からは砂沢式に類似の文様を有する6個の破片が出土している。半田氏の報告にある第5図4～8は8)、明らかに砂沢式特有の三角形工字文を有し、また伊東氏の論文に見られる第2図10・11の台付鉢9)も同様である。しかし後者では、近似の文様でありながら器形に若干の相違が存在し、また伴出の土器に砂沢はもちろん、五所においても発見されなかった連続山形文や、菱形文もあって、文様のみならず器形の面も、多彩にわたっている。さらに土器面には靱の圧痕が見出されるなど、砂沢や五所に近似しながらも、有する内容はより弥生式的である。このような面と、谷起島式を伴出するという点10)から、志藤沢式は五所式の次に編年上の位置が定められると思われる。したがってこれらを表であらわすと、次のようになる。



五所式と田舎館式の関係は、上記の表の如く、田舎館式の前に五所式が位置することはほぼ疑いない。しかし直接五所式から田舎館式に繋がるような、近接した土器は見られない。したがってなお両者のあいだに、プラスアルファが存在すると思うが、この点については、田舎館式に関して詳細の知り得た後にいたしたい。しかし田舎館式には、靱痕のある土器と稲作を証明する焼米粒が出土し11)、さきの志藤沢式とともに、弥生式の絶対的条件を具えているが、五所式ではその痕跡は見当らないし、遺跡の所在する場所も稲作に適するところではない。したがってこの型式の時期には、未だ稲の栽培が行われなかったと思われる。

次にこの遺跡は石器がすくなく、綿密な採集を行っても、わずか1個を得たに過ぎないし、それも刃物としての主要な役割を果たすほどのものではない。したがって山内清男氏が

註 8) 半田市太郎，秋田県南秋田郡琴浜村志藤沢遺跡発掘調査報告 秋大史学9。

註 9) 註5に前掲。

註 10) 註 5 に前掲。

註 11) 註 5 に前掲。

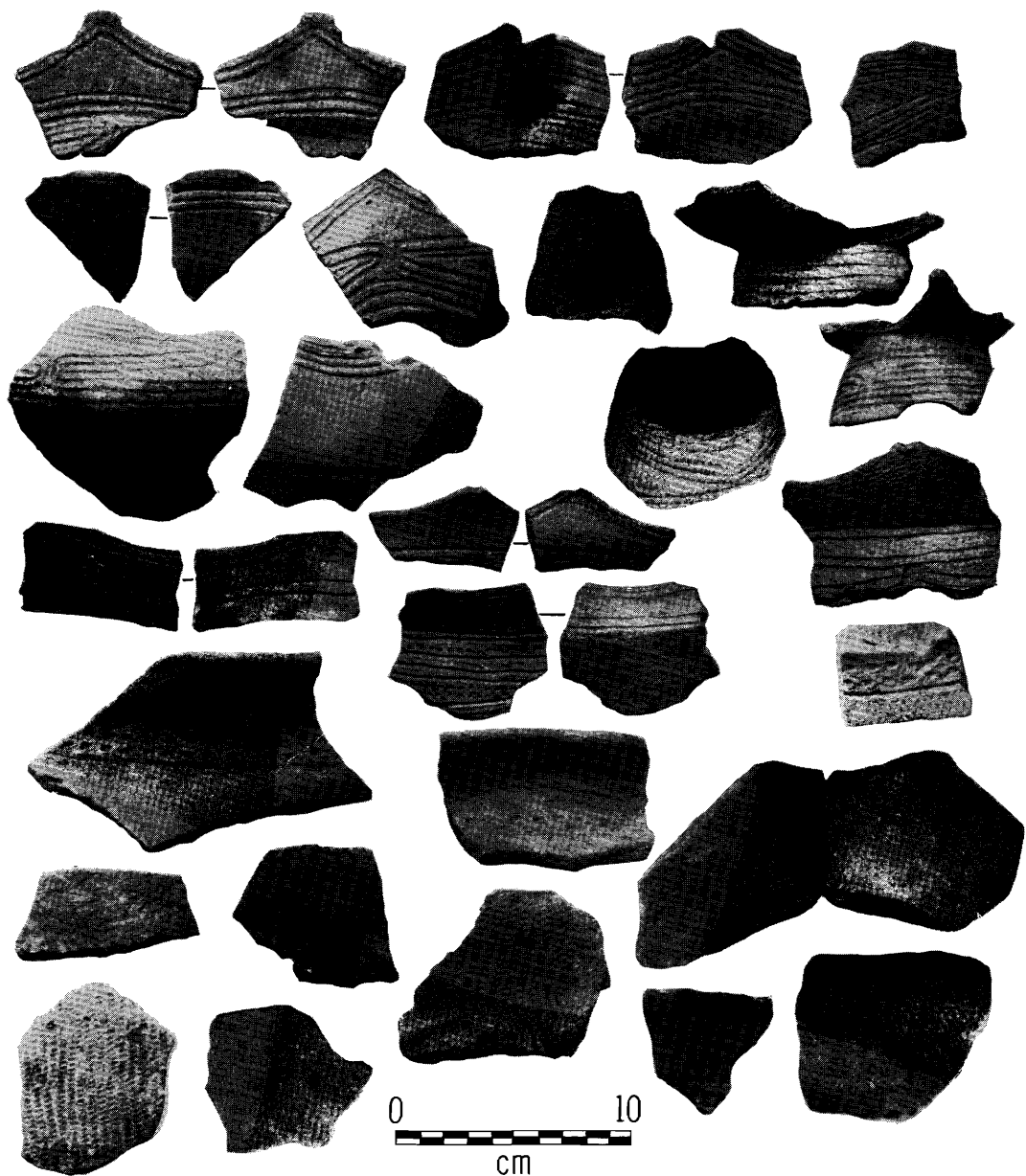
提唱し、江坂氏によって再主張された、続縄文式文化¹²⁾の範疇に含められるものと思う。斯く見れば、砂沢式まで栄えた縄文式文化もそろそろ限界に達し、あらゆる面で行き詰りを生じつつあったのであろうか、消え去り行く縄文式に続いた五所式は、そのもつ内容の面から考えれば、行き詰った末期的症状の、ある意味で犠牲となったものであろう。そこへ救いの神としてあらわれたのが、稲作を伴う弥生式文化であった。

5.

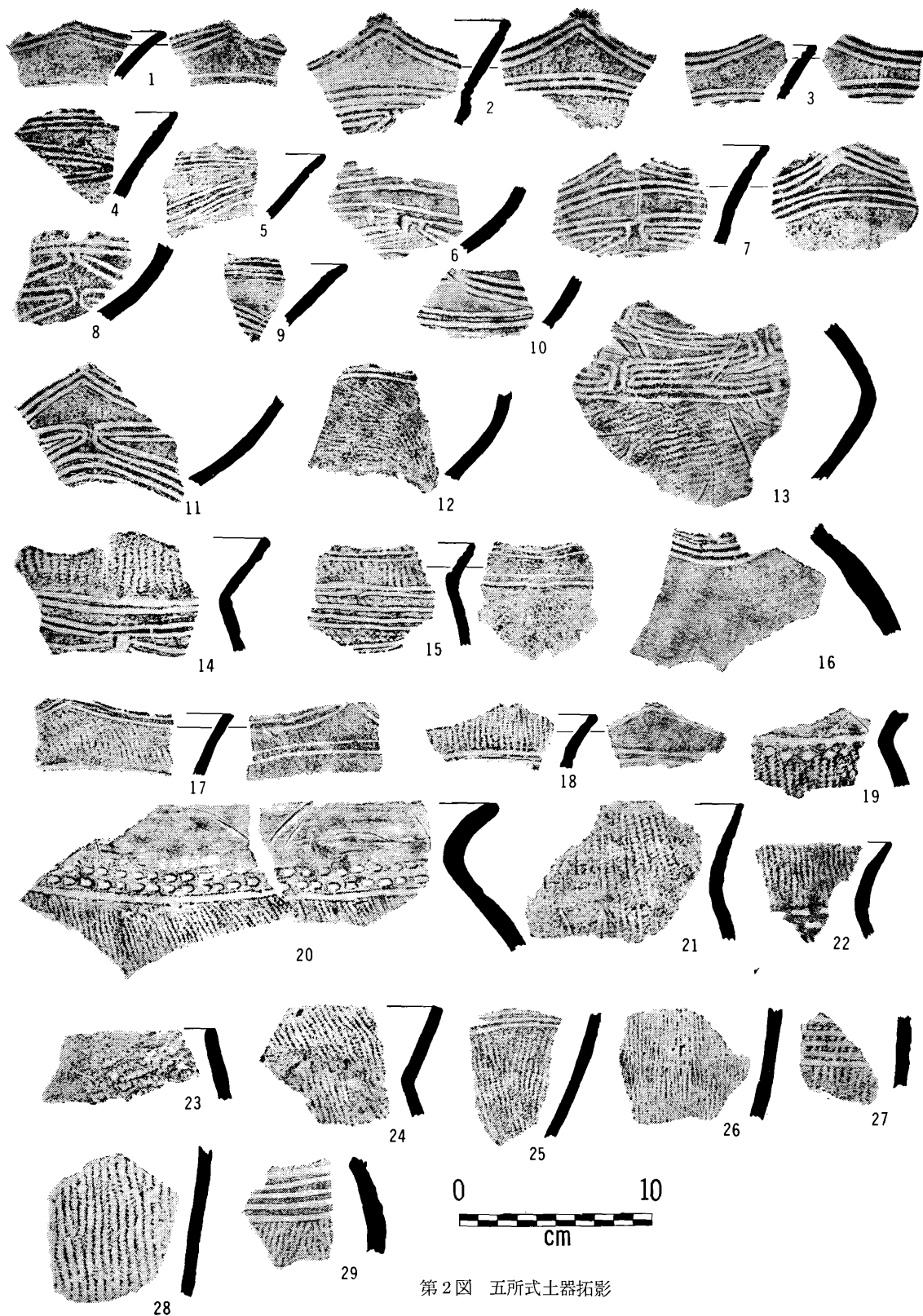
この報告を草するにいたった動機は、昨年8月九学会連合下北半島総合調査で日本考古学会が実施した、青森県下北郡川内町邪馬尻ならびに、宿野部小・中学校西側遺跡から発掘された土器が、五所式にきわめて類似し、そのため五所式が、東北北部の縄文式終末期の土器と、それらを結ぶ掛け橋になるのではないかと考えたからである。浅学と拙文のため思うに任せず、甚だ雑駁な文章に終始したことをお詫びいたしたい。

最後に、挿図の作成に協力下された、川崎凱久・長谷川正夫両君の厚意に感謝する。

註 12) 江坂輝弥, 奥羽地方北部の続縄文文化の問題 貝塚63号。



五所式土器図版



第2図 五所式土器拓影